

**【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 11章17～22節、29～31節**

<sup>17</sup>信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。<sup>18</sup>この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。<sup>19</sup>アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。<sup>20</sup>信仰によって、イサクは、将来のことについても、ヤコブとエサウのために祝福を祈りました。<sup>21</sup>信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちの一人一人のために祝福を祈り、杖の先に寄りかかって神を礼拝しました。<sup>22</sup>信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骨について指示を与えました。

<sup>29</sup>信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました。同じように渡ろうとしたエジプト人たちは、おぼれて死にました。<sup>30</sup>信仰によって、エリコの城壁は、人々が周りを七日間回った後、崩れ落ちました。<sup>31</sup>信仰によって、娼婦ラハブは、様子を探りに来た者たちを穏やかに迎え入れたために、不従順な者たちと一緒に殺されなくて済みました。

**【福音書日課】マタイによる福音書 21章18～32節**

<sup>18</sup>朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。<sup>19</sup>道端にいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかは何もなかった。そこで、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と言われると、いちじくの木はたちまち枯れてしまった。<sup>20</sup>弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。<sup>21</sup>イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言っても、そのとおりになる。<sup>22</sup>信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

<sup>23</sup>イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を与えたのか。」<sup>24</sup>イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。<sup>25</sup>ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも、人からのものか。」彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。<sup>26</sup>『人からのもの

のだ』と言えば、群衆が怖い。皆がヨハネを預言者と思っているから。」<sup>27</sup>そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

<sup>28</sup>「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行ってみなさい』と言った。<sup>29</sup>兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。<sup>30</sup>弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。<sup>31</sup>この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。<sup>32</sup>なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

### 「天からのもの」を信じる【こども説教のために】

「世界聖餐日」は、世界中の多くの教会で記念されている特別な祈りの日です。それぞれの教会が「聖餐」を祝うことを通して、世界中の教会に連なる人々と「一つ」になることを求めて祈るときです。

「聖餐」は、主イエスが弟子たちとの最後の晩餐の席でお命じになられた「食事の儀式」です。主イエスをご自分の御体と御血のしるしとして分けてくださった「パンと杯（ぶどう酒・汁）」にあずかることを通して、わたしたちが「一つ」になるようにしていただく、祈りの式です。主イエス・キリストと「一つ」にさせていただくしるしとして「洗礼」を受けた者が、「聖餐」の「パンと杯」にあずかります。「洗礼」によってキリストと「一つ」にさせていただいていると信じるのが、「聖餐」の「パンと杯」にあずかることによって互いに「一つ」にされることを信じることになるからです。

教会に招かれて来られた人は皆、「洗礼」へと招かれ、「聖餐」にあずかるよう促されています。まだ受けていない人にも、そのときが早く訪れるよう、わたしたちは願っています。まだ自分のことではない、と思っている方もあるかもしれません。わたしたちも、本当に自分が「洗礼」を受けた者として「聖餐」にあずかって良いのだろうか、不安になるときがあります。

教会は、そのようなわたしたちに、「聖餐」への招きとして、「心を高く上げよ！」と教えてきました。わたしたちはいつも、地上のこと、足元のことばかりに思いを囚われているかもしれません。けれども、心を高く上げて、天の御父である神の御心を尋ねるとき、自分の姿も、世界の様子も、まったく違ったものとして見え始めるのです。「天からのもの」を知り、地上でどう歩むべきか、その道が示されるようになるのです。

## 《神のぶどう園》に行って働く！

「世界聖餐日」を教会が記念し始めたのは、戦争で世界中がバラバラになってしまった痛みがまだ癒えていなかった、第二次世界大戦終結の翌年 1946 年のことです。

世界中の国を巻き込んだ戦争は、すでに幾度も繰り返されてきていました。その戦争に、多くのキリスト者が関与してきていました。教会は、世界がバラバラになっていくとき、壊れていく世界でお互いを和解させる役割を引き受けることができずにいました。幾世紀にもわたって、教会自体が分裂を重ねてきていたのです。

20 世紀になり、世界大戦が繰り返される中、諸教会はようやく、世界が互いに和解し、一つの世界を造っていく関係を始めるために、自分たちにも責任があると考え始めたのです。まず、分裂していた教会自身が「一致」できるように祈ることから始めよう。それが、世界中の教会に呼びかけられた「世界聖餐日」でした。まだ、ローマ・カトリック教会と他の諸教会が互いに「異端」呼ばわりしていた時代でしたが、その後、確かに教会は変わりました。諸教会は互いに、「今は別々に分かれている兄弟たち」と呼び合うようになり、すでにいくつかの教会同士で、互いに一致できることを確かめ合っています。わたしたちの「日本基督教団」も、そのような歩みの中にあるのです。

この礼拝の終わりに歌う「主の食卓を囲み」は、すでに皆さんも馴染みの讃美歌でしょう。日本人の作詞作曲した新しい讃美歌ですが、よく歌われるようになりました。この讃美歌は、もともとカトリック教会の音楽家が自分たちのミサで歌う聖歌として作ったものです。実際、カトリック教会のミサで歌われることもあるようです。それを、多くのプロテスタント教会も聖餐讃美として歌うようになりました。聖餐は、かつて諸教会が分裂していたときには分裂の象徴でしたが、今は、主イエスによって定められた「主の食卓」として、すべてのキリスト者が「一つ」であることのしるしなのだ、この讃美歌が共に歌われることによって証しされているのです。

わたしたち《主の食卓》を囲む教会に招かれた者の願いは、この世界で争っている人々が和解し、敵対する人々に平和をもたらし、世界をひとつの《神のぶどう園》として、すべての人が共に働き、共に生きることができるようにしていくことです。それは願いということに留まらず、わたしたち《主の食卓》に招かれてきた者たちの務めでもあるのです。

天の御父は、わたしたちに「子らよ、今日、わたしのぶどう園に行って働きなさい」とお命じです。「御国が来ますように」と祈る教会は、ただ教会を《神のぶどう園》とすることだけでなく、世界が《神のぶどう園》とされること、《神の国》とされることを、「天からのもの」と信じているのです。

## 考え直したらよい

《神のぶどう園》での働きのために呼び集められ、また世界に遣わされようとしている、と言われても、戸惑うことがあるかもしれません。それが「天からのもの」と信じられなければ当然ですが、たとえ信じられても、「それをするのは、このわたしですか？」と思うこともあるでしょう。

主イエスの「二人の息子のたとえ」。父に命じられて、兄息子は、はじめは「いやです」と反発しますが、後で考え直して行くのです。一方、弟息子は、はじめは「承知しました」と良い返事をするのに、結局行かなかった。

わたしは、五人兄弟の中で育ち、兄も弟もいましたから、このたとえの兄と弟の反応が実感として分かる気がします。弟としては、兄貴が反抗して親と衝突している様子を見ていれば、とりあえず親の命じることには「はい」と言っておこうとする習性が身につきます。同時に、兄貴が従わないで済ませている様子を見ていれば、親の手前良い返事をしていても、実際にはうまく従わないで済ませておこうとも考えるでしょう。一方、兄としては、何でも弟より先に親から命じられることが不公平に感じられ、「いやだ」と反発したくなることもあるのです。しかも、弟は、調子のよいことを言いながら、親の言いつけを守らなかつたりするのです。そして、結局、兄として最後には親の命じたことに従わなければいけないことも分かっているのです。

以前の「口語訳聖書」では、設定が兄と弟で反対になっていました。兄は、最初「はい」と言いながら行かないけれども、弟は、「いやです」と言いながら結局行った、とされていたのです。このほうが、「兄」をユダヤ人、「弟」を罪人や異邦人にたとえることの多かった教会では受け入れやすかったようです。実際は、今日朗読された設定が主イエスの教えだったのでしょう。

主イエスは、マリアとヨセフの長子として育てられ、弟や妹が大勢いました。ですから、このたとえで、主イエスは、ご自身を「兄」になぞらえられたところがあるのではないのでしょうか。主イエスも、「天の御父」の御心を、最初から素直に「はい」と聞き入れるばかりではなかったのです。「弟たち」の姿を見て、葛藤がおありだったのです。「いやです」と拒まれたこともあったのでしょう。けれども、結局、考え直されたのです。「最後の晩餐」の後、主イエスは、弟子たちを伴って祈られました、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(マタイ 26:39)。

主イエスも、繰り返し立ちどまられては、考え直されました。わたしたちも、そうすればよいのです。立ちどまり、考え直すために、わたしたちは、「安息日」に代わる日曜日を祈りの日として、主にお会いする日として、主の食卓にあずかる日として、定めていただいていたのです。